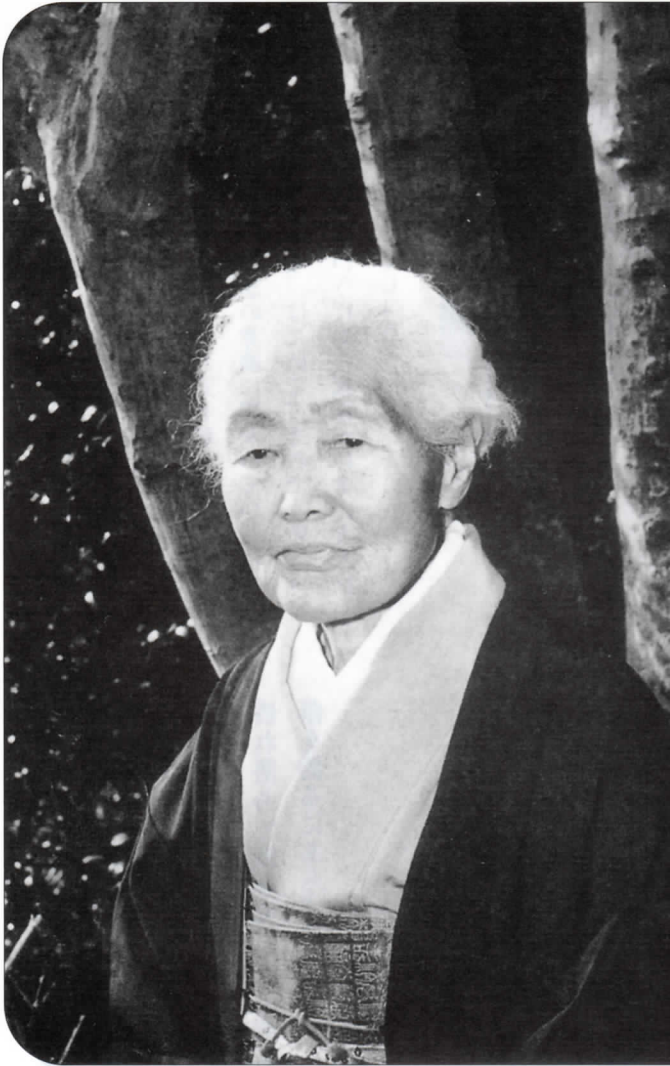


新 歌人群像

四賀光子

めでたき女房歌人

伊東悦子



太田水穂とのロマン

四賀光子は歌人太田水穂の妻である。近代短歌の流れの中で、独自の日本的象徴主義論を唱え、歌誌「潮音」を己が牙城として生涯反アララギ的立場を貫きとおした水穂にとつて、光子はもつとも身近な良き理解者であり、歌論の忠実な実践者であり、そして頼もしい後継者となったのである。

光子は明治十八（一八八五）年四月二十七日、父の赴任先である長野市で生まれた。父有賀盈重は明治十年に当時全国に唯一つしかなかった東京師範学校を卒業して教職に就いていたが、早くから歌を詠み、漢詩を作り、南画を嗜むなど所謂文人生活を楽しんでいた人で、父母が朝茶を飲みながら、折々交わすそうした会話を子供心にも、いいなあ、と感じた、と後年のエッセイにあるが、光子の文学的感性は幼児期からの、こうした家庭環境の中でおのずから育まれたのであろう。なお筆名「四賀」は父の故郷諏訪四賀村に因るものである。

光子が水穂と出会ったのは十八歳、長野県師範学校女子部を卒業、三年間の寄宿舎生活を終えて、松本市内岡田小学校に赴任した明



結婚当時、水穂と（明治42年）

治三十六年の事であった。九つ年長の水穂はすでに新派和歌同好会「この花会」を組織、第一歌集『つゆ草』も上梓して、新進歌人、文芸評論家として活躍していたが、その年の春、松本高等女学校教師として転任して来ていたのだ。向学心の強い光子が古典や和歌を学びたいと水穂の下宿を訪ね、「この花会」にも入会して作歌を始めることから交際が始まるのだが、水穂は、この温雅でいながら意思強く理知的な少女に自分にはない豊かな才能を感じたのだらう、是非わが妻にと求婚、翌々年の明治三十八年三月に二人は婚約している。しかし実際に結婚するのは四年後の四十二年、東京の新居で一緒に暮らし始めるのはさらにその一年後のこと。婚約後、光子は

教師と歌人と妻と

単身上京、女子高等師範学校文科に入学、かねてからの勉学への強い志を貫き通したのであり、水穂は彼女の希望を許し、卒業までの四年間を待つと決めて婚約したのである。この時代にあつて、あくまで進学の道を選んだ光子も、そんな生き方を妻となる女性に許した水穂も、稀有なほどの理想主義者、ロマン主義者であると言わなければなるまい。しかも驚くべきことに、二人は、その夢のようなロマンを何の傷もつけず成就させたのであった。二人が離れ離れに暮らした時期に交わされた手紙の一部は光子の随想集『花紅葉』に収められているが、まことに滋味深く興味深い。

やはらかにわが黒髪も匂ふなりさくら
さく夜の湯帰りの道 藤の実 以前
手を捕りてむかへば涙流れたりただお
だやかにみのりこし恋

少女にて文よむわざも妻としてかしづ
くすべも君ぞ教へし

激しい恋ではない。しかしながいの真を尽くして到りえた婚である。水穂への絶対的信頼感の上になつて、「文よむわざも妻として

かしづくすべも」と、言い切れる幸せな光子であった。水穂もこの間に上京し、新聞などに小説や文芸評論、随想等を発表する一方、日本園科医学学校倫理科教授の職を得ており、夫婦とも教師としての共稼ぎで新生活はスタート、小石川三軒町の新婚の家には、しばしば若山牧水や北原白秋なども訪ねて来たことから、光子は初めて歌を「創作」誌上に発表するようになった。つまり、後年光子自身が述べているように「作歌のはじめの頃は新詩社のロマン短歌が衰えて、牧水や前田夕暮などの自然主義の勃興期で、その中で育つたため少しも意識せずその頃の時代の色合いを持つ」こととなる。

大正四（一九一五）年、水穂が「潮音」を創刊してからは同人としていよいよ本格的に作歌するようになったが、この自然に身についた時代の色合いは、水穂歌論に従いながらも微妙な違いを生み、それが光子の個性となつていったことにも注意しなければならぬだろう。

雨の音かすかにすれば教え子はまなこ
さびしくわれを見にけり 藤の実

母われにあやまちなしと誰か云はん説
いふ吾子を見つめるにけり

四賀光子

新歌人群像



鎌倉・扇が谷の杳々山荘で水穂と（昭和21年）

板敷に投げ出ししてある露の束もらひ湯
をして帰り来にけり

〔朝月〕

ひぐらしの一つが啼けば二つ啼き山み
な聲となりて明けゆく

〔麻ぎぬ〕

結婚後数年、平穏な暮らしの中で子のない寂しさを嘆くこともあった光子だったが、大正五年、夫の亡兄の遺児兵三郎（当時八歳）を養嗣子として引き取った。のちの太田青丘である。「この幼児保育の経験は自分の精神生活の上に大きな影響があった」と自筆年譜にわざわざ記した心情にはなみなみならぬ

ものがあつたのだらうと思う。また、水穂が安倍能成、阿部次郎らを招いて開いていた「芭蕉研究会」を傍聴することによって得たものも、例えば、露の束やもらひ湯、ひぐらしの声、などに巧みに生かされているといえよう。さらにこの時期、忙しい学校勤務と家事の間を縫って数年間にわたり毎朝、入藏僧として有名な河口慧海師について、法華経ほか太子三経等を聴聞していることも特記すべきだろう。

「潮音」を支えて

昭和七（一九三二）年四十七歳で、長年勤務した府立第一高等女学校を退職、家居して「潮音」編纂に主力を注ぐこととする。水穂は早くに退職して文筆に専念しており、茂吉との病雁論争で世を騒がしたのが昭和五年頃、われこそ和歌本流といよいよ対アララギ、対歌壇への意欲を燃やし、全国的に社友も増えて多忙な時期、光子はしっかりと裏で支える妻であり、同志であった。そして戦争期に入る。

警報のとどろくなかも筆おかぬまなご
の澄みを時におどろく

〔麻ぎぬ〕

天のごとく太陽のごとくわが上に輝き
居たるたましひ衰ふ

〔白き湾〕

独りだつたましひ願ふわれにして現し
身 孤独となるは恐ろし

水穂は戦時下も己の信念に基づいて「日本和歌史論」を書き継いだ。しかし彼にとつて思いがけなかった敗戦は、心にも身体にも大きな影響を与えたようで、光子はやがて一切を放下して行く夫を見守るよりほかなくなつて行く。常に水穂の指導の下、庇護のうちにあつた光子にとつて、否応もない自立の時であつた。そして昭和三十年一月一日、水穂は七十八歳で逝去。この時期から後の光子は一人の歌人として、「潮音」を代表する者として、それまでの謙抑さをうち捨て、自らの裡に蓄積されたものを自ら確かめるごとく一気に開花させ、自在な個性を見せて行く。昭和三十一年に出された第五歌集『白き湾』は、そうした意味からも最も気力溢れた作品集として評価の高いものである。

青くあれ青くあれよと吹く風にけふも
青くて揺るる柑橘

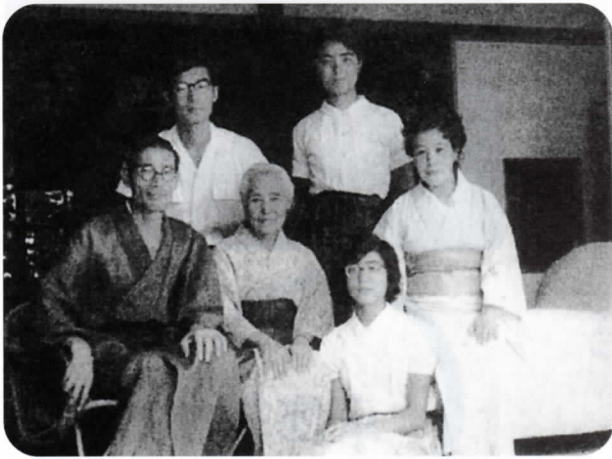
〔双飛燕〕

ただ一人ゆく砂はまの一步一步われみ
づからの作りゆく道

帰り来てわが家の坂に立ちて思ふいそ
ぐことなく枇杷は赤らむ 〔白き湾〕
黒松の防風林をふちとして一湾は銀の
氷を充たしたり

賢明の豊かさ

折々の静養のため求めた鎌倉扇ガ谷の山荘
に移り住んでいた二人である。平明に実に就
いて詠いながら、それがそのまま心象の景と
もなつて作者の深い人生観を感じさせてくれ



杳々山荘で。前列左より青丘、光子、一人おいて絢子（昭和37年）

る作品である。そして艶とも呼ぶべき調べの
格調の高さは、日本的風雅を説き続けた水穂
の弟子としての長年の修練の賜物であるとい
えよう。さらに、光子の関心は、己の身辺ば
かりにとどまらなかった。

日本人漁夫スハイかも知れぬとまつ先にあ
びせられし言葉のろはれてあれ 〔白き湾〕

すこし痩せて妻と歩めば平凡な市民に
すぎずニキタ・フルシチヨフ 〔青き谷〕

文化革命血の肅正のなき意味を云はれ
て気づく 遅しと思はず

「遅しと思はず」と詠ったとき、光子八十
三歳。八十歳をもって「潮音」主幹の地位を嗣
子青丘に譲り、いっそう自由な好奇心と向上
心をもって光子らしい境地を拓いて行ったの
である。振り返って見れば、水穂逝去直後に
青丘の最初の妻が没するという悲運に遭った
ものの、光子の生涯は恵まれたものであった。
かの養い子は、中国学者としても、「潮音」
後継者としても立派に成長してくれた。何か
とこまごま気を遣ってくれる息子とその妻絢
子、三人の孫に囲まれつつ、読み、書き、詠
い継ぐ穏やかな老年の日々は、まさに光子が
少女の頃に夢に描いたとおりのものであった。

われみずから許さんとして涙おつひた
すらなりき凡人の生き 〔青き谷〕

青年彼 よしと云ひし肥満少女豊頼た
もたん地に帰る日も 〔遠汐騒〕

死ぬるまで伸びんと云ひし若き日の不
敵の言葉いま思ひいづ

九十年生ききしわれか目つむれば遠汐
騒の音ぞきこゆる

ある時、水穂は「私は襖をカラッと開け、
ピシャと閉める。家内は少しばかり開けて出
入りする。私は深い淵に足を入れて苦労して
渡る。家内は浅い瀬を歩いてわけもなく渡る。
あんな生き方もあるのかと思ふ」と述べた
ことがあるという。この違いこそ、青年水穂
が是非妻にと強く望んだ優れた美質、天才肌
の彼をおのずから寛がせ、落ち着かせてくれ
る賢さと豊かさではなかったかと思う。光子
もまた、自らを凡人と言いつつ常精進を怠ら
なかった心の奥には、終生、良き師であり、
同志であり、またライバルとしての水穂がい
たに違いない。かけがえのない比翼の相手を
得て、九十歳の最晩年まで詠い続けた四賀光
子は、まことめでたき女房歌人である。